

活力ある社会を創る適応自在AIロボット群

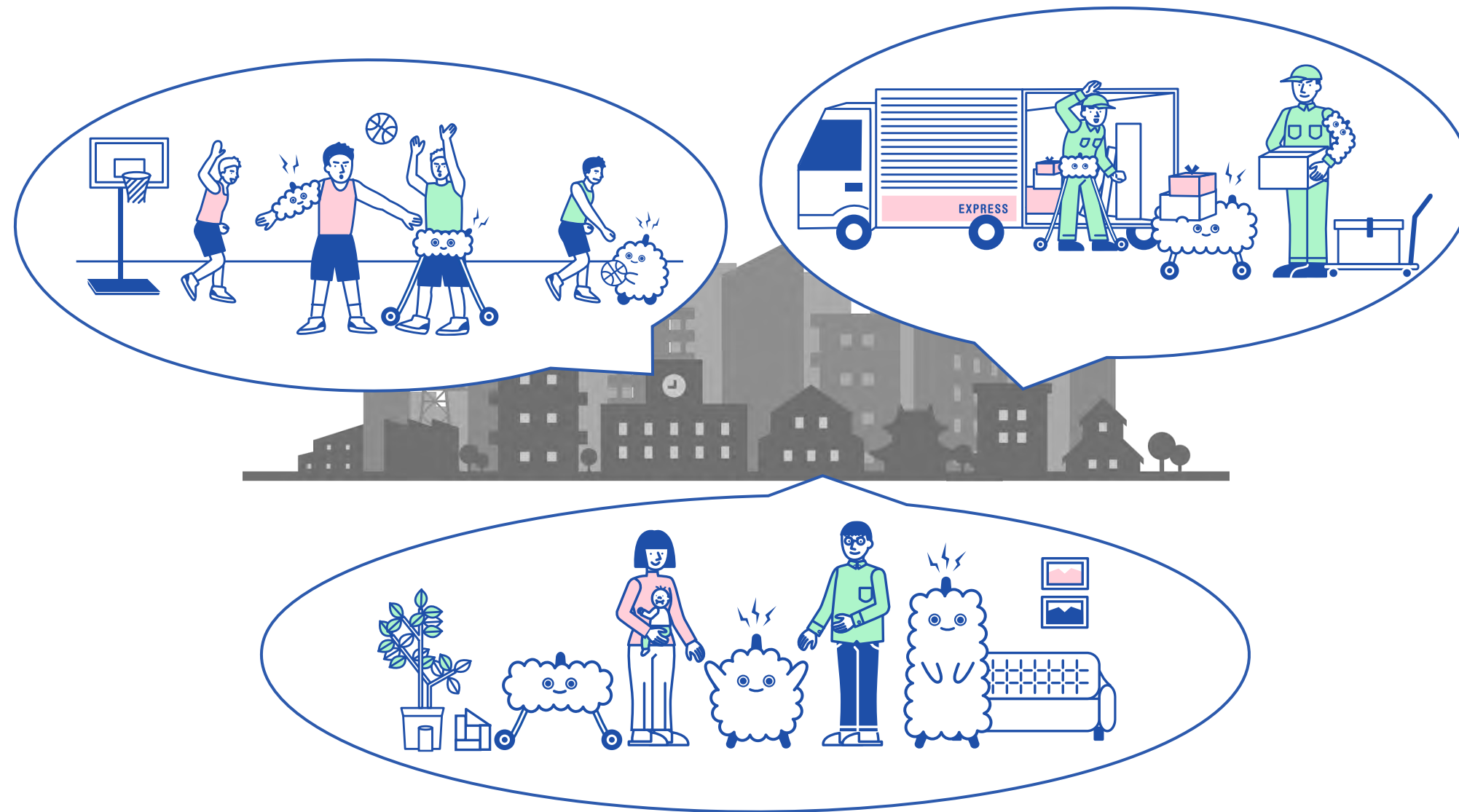
ムーンショットプロジェクトの目指す2050年の社会とは

目指す2050年の社会像

■ 多種多様な複数のAIロボットが公益施設*等さまざまな場所に**社会インフラ**として設置・整備され、誰でもそれらのAIロボット群の支援・サービスを受けて共生することができる社会

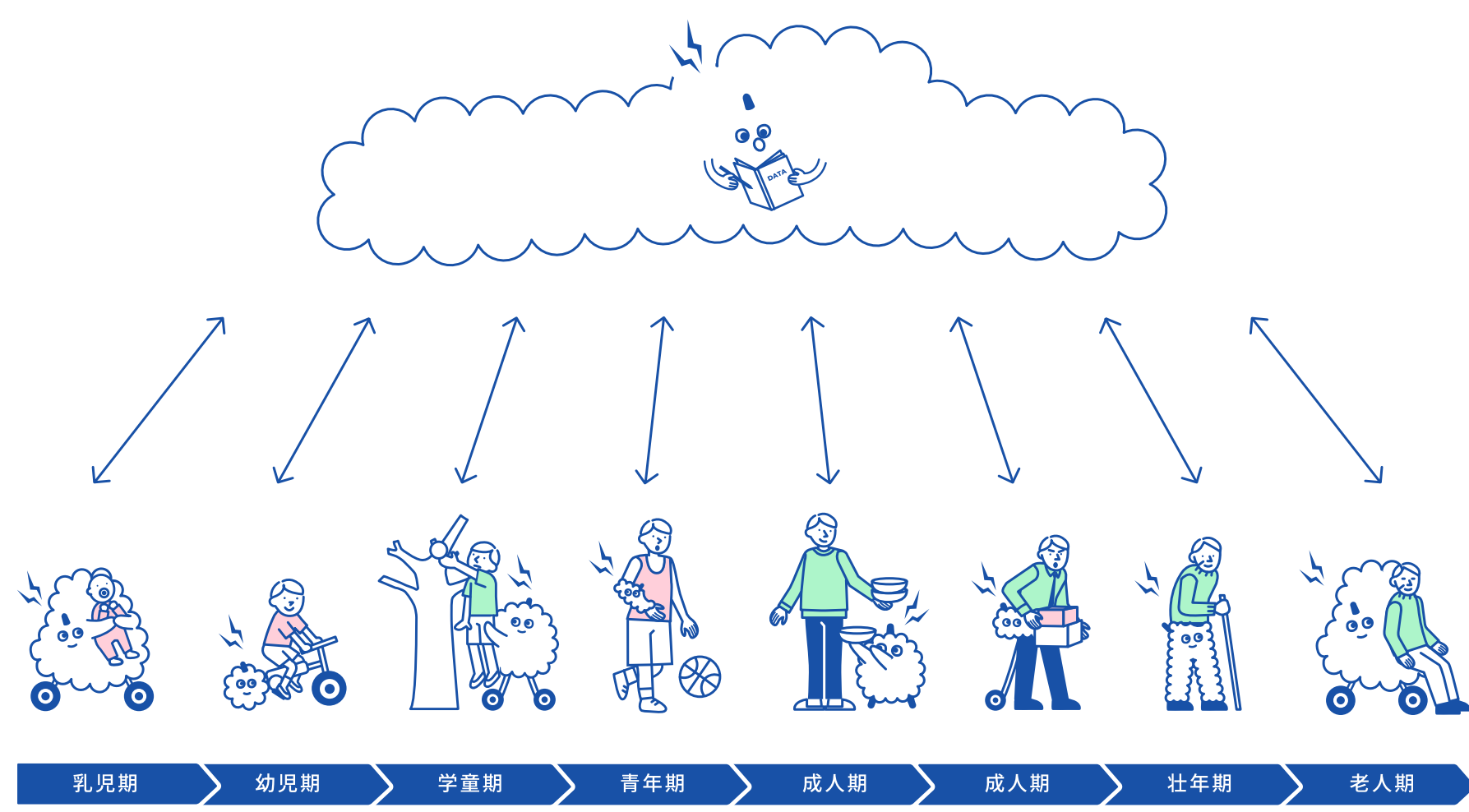
* 商業施設、文化施設、観光施設、スポーツ施設、介護施設、病院、保育施設、他

■ 利用場所やタスク、利用者に合わせて適切なロボットが選択され、形状や機能が利用者に適応することで目的の支援・サービスを過不足なく提供することが可能な**適応自在AIロボット群**



■ 複数のAIロボット群が利用者との相互作用や共生の経験を蓄積し活用することで、**形状や機能が異なるAIロボット**であっても個々の利用者に適応し、**人生に寄り添った支援・サービスを提供する**

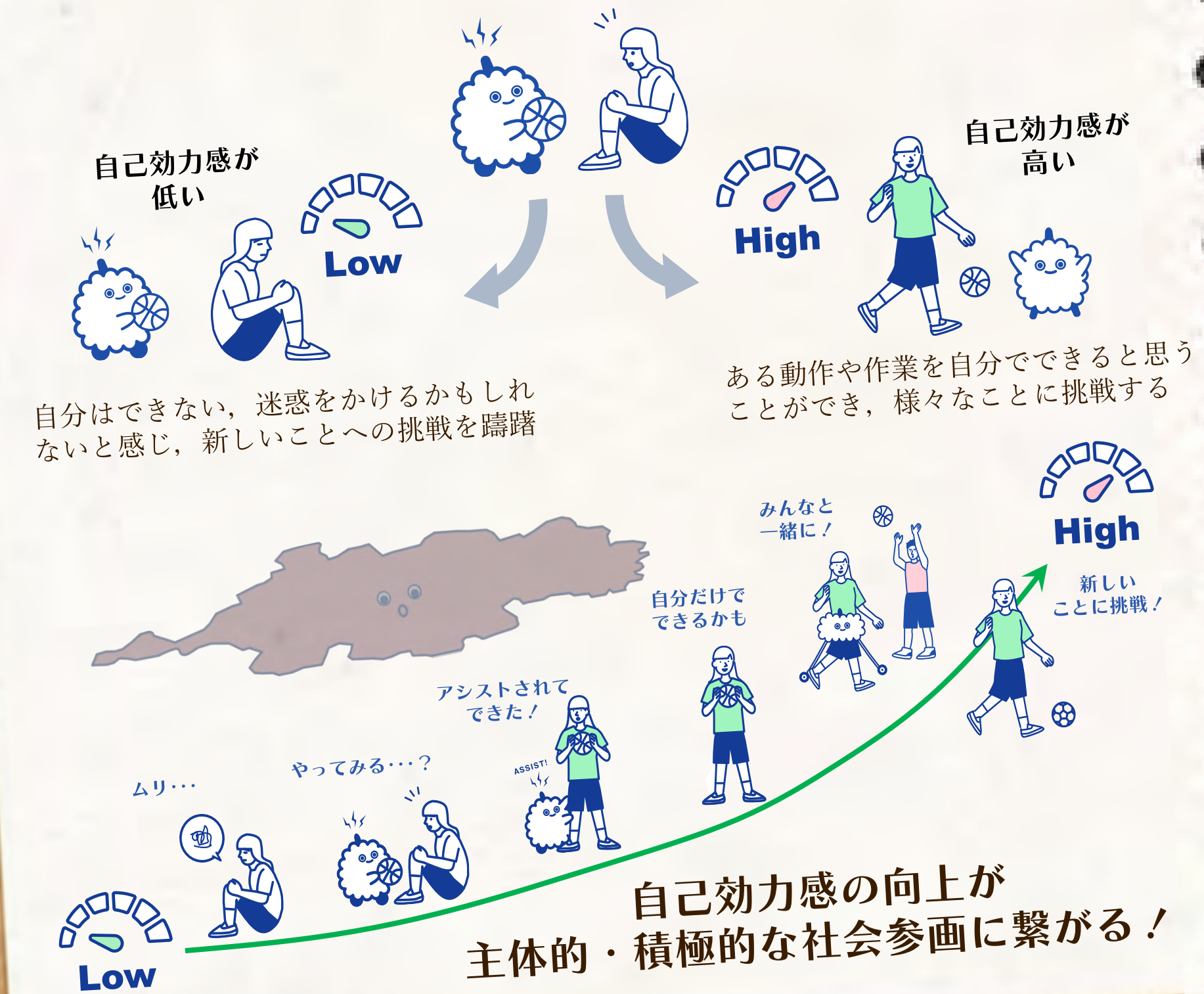
■ 適応自在AIロボット群による人生に寄り添った過不足のない支援・サービスを通じて、**利用者の自己効力感が向上し、主体的・積極的な社会参画を促す**



自己効力感とは

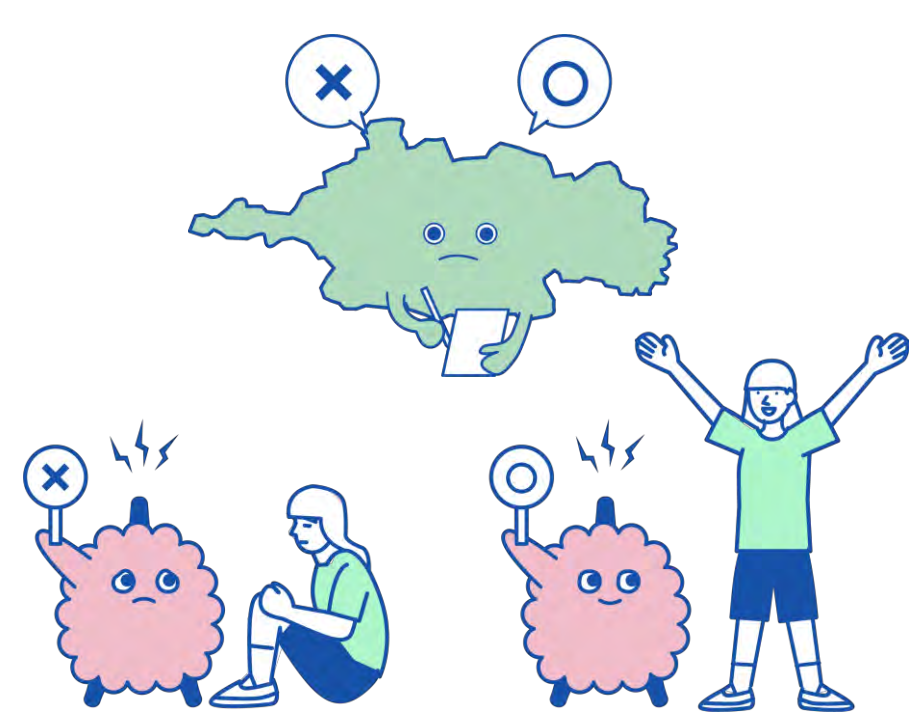
「ある結果を生み出すために必要な行動を、どの程度うまく行うことができるか」ということへの本人の認知*
(自分の行動に対する可能性の認知)

* 情動や感情とは異なり、やる気やモチベーションとも異なる

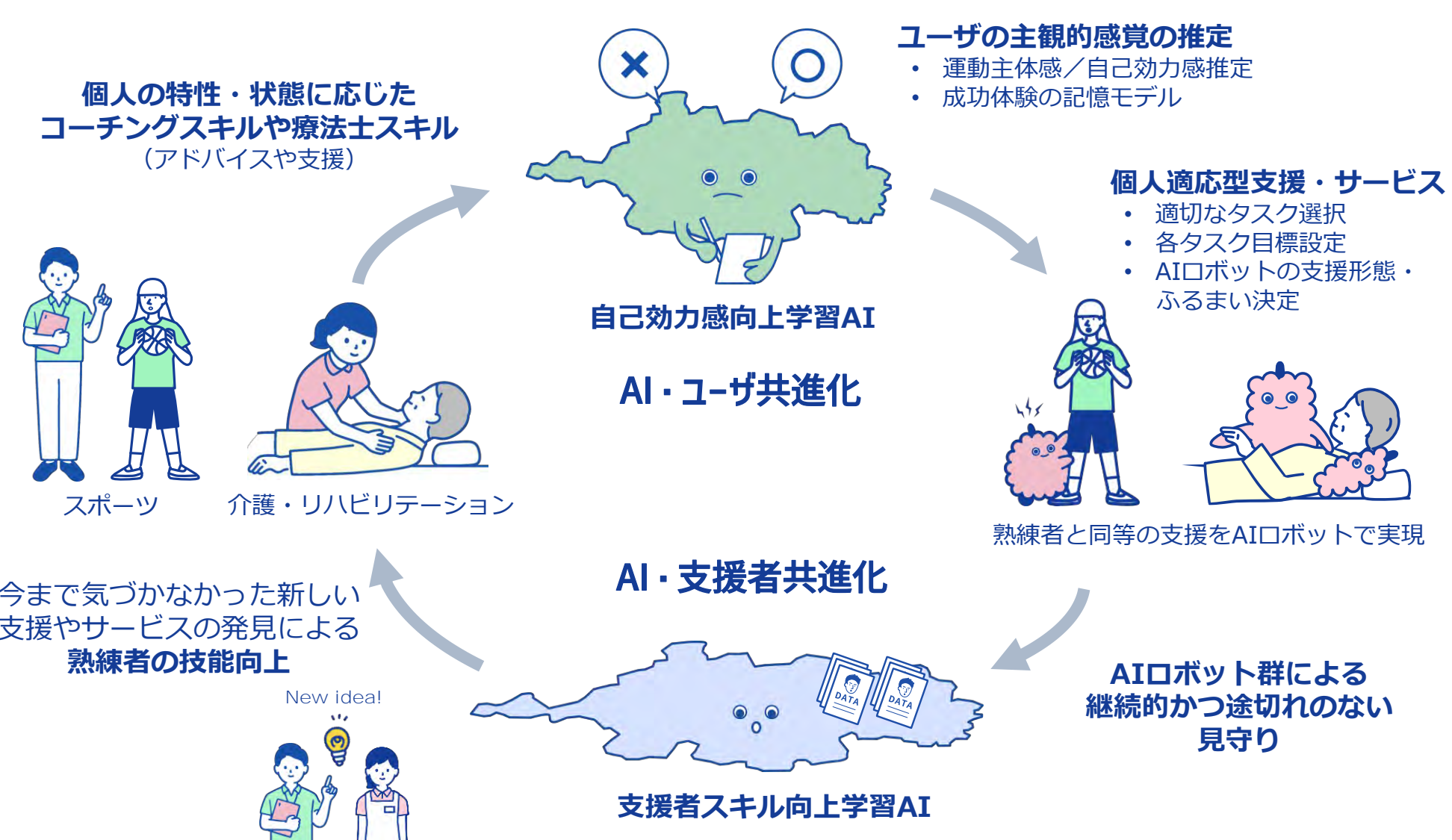


社会像を実現するための3つの研究開発項目

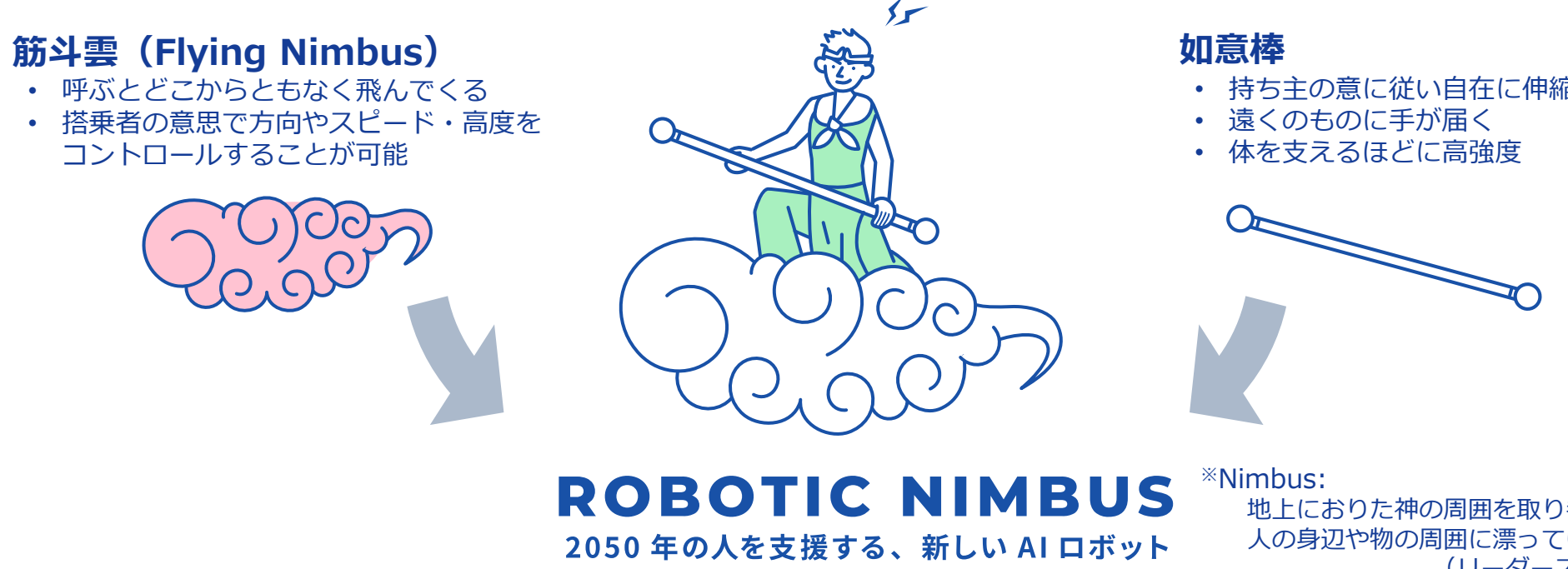
研究開発項目1 人・ロボット共進化AI開発



ヒトに適切な支援やサービスを提供するためにロボットがどのようなふるまいをすべきかを導き出すAI



研究開発項目2 適応自在AIロボット開発



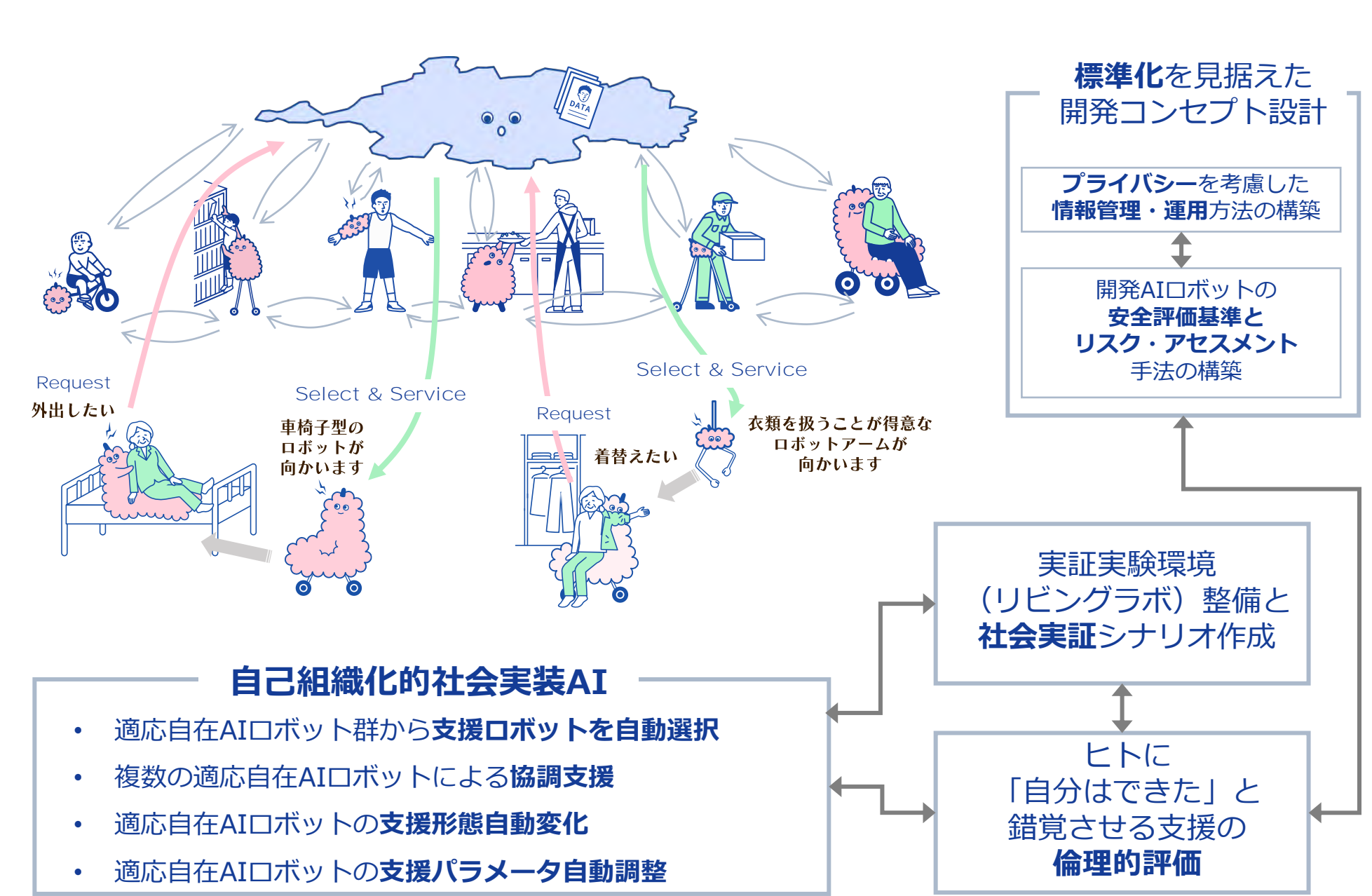
ヒトに安全かつ適切な支援を提供するためのロボットハードウェア



研究開発項目3 共進化AIロボット群社会実装



AIとロボットハードウェアが相互に進化し、日常生活でAIロボット群を当たり前使えるようにする社会実装



2030年のマイルストーン

誰もが日々の生活だけでなく、旅行、スポーツ等へ意欲的に参加できる活力ある社会の原動力を創成できることを目指し、**特定の環境下で個々のユーザやニーズに合わせて形態・機能が変化し適切なサービスを提供する適応自在AIロボットを開発する。**

特に介護現場を利用して実証を行う

- 受け皿の不足：特別養護老人ホームに入所したくてもできない人の数：約30万人（2019.4.1時点）
- 担い手の不足：2035年には約80万人の介護人材不足との報告
- 成人期～壮年期の離職の原因にも：2017年には約9万人が「介護・看護」を理由に退職

ムーンショットとして未来に活用できる新しく画期的な解決策

近い将来に適応できる現実的な解決策（スピノアウト）

超高齢化社会の課題解決に向けて両輪を見据えた社会実装

